

存在の充溢を求めて

——D. H. ロレンスの教育論

浅井雅志

序

Everyman shall be himself, shall have every opportunity to come to his own
intrinsic fullness of being.⁽¹⁾

D. H. ロレンスが生前（おそらく1918年の末）に書いた唯一のまとまった教育論、“Education of the People”に見られるこの言葉は、彼の教育に対する考えの根底に横たわるものといえよう。今、「教育論」と言ったが、これは厳密な意味での教育論とは言えず、むしろ彼の人間観、中でもとりわけ彼が自嘲的に“pseudo-philosophy”⁽²⁾と呼んだ自らの哲学および生理学の披歴ともいうべきものである。それゆえ、この論を読み解く上での最大のポイントは、彼の哲学の正確な読解と、その哲学が彼の教育観とどのように結び付いているかを探ることである。

ロレンスの explanatory writing にはしばしば見られることであるが、彼はここでも必ずしも論理的に論を進めてはいない。むしろいくつかの鍵概念が螺旋的、循環的に現れては消え、その間にいくつかの教育的な提言がなされる、といった体裁をとっている。その鍵概念を整理してみると、以下のようになる。

1. 人間は一個の孤立した存在である。
2. 人間は知的意識、自意識を持つに至り、その結果、愛とか合一とか結合とかいった観念に縛られるようになり、自らが孤立し、自立した存在であるということを忘れている。
3. 同じ知的意識が、人間は皆平等だという観念を人間に植え付け、それがあまりに強い固定観念になってしまったために、教育制度をはじめとする、人間存在のあらゆる側面に弊害を及ぼしている。人間はあらゆる点から見て不平等な存在なのである。

4. この知的意識は、その本来の分を果たす、すなわち本来やるべき機能を行っている間はいいのだが、人間はこれに過大な評価を与えるようになり、ついにはこれが意識の唯一のあり方、形態だと誤解するに至った。この知的意識の及ぼす最大の害悪は、それがそれ自身を見ようとすることで、そのために人間は自意識的になり、あらゆる自発的な流露はせき止められ、まったく不自然で歪んだ存在になり果てている。

大体以上の4点が主要な鍵概念で、これらが、言葉を変え、論じ方を変えて、変奏曲のように繰り返し現れ、その間にはさまって、思い出したかのように教育に関する発言が現れる。しかしその発言、提言も、その具体性、実現可能性については深く掘り下げられることはなく、そのあたりに、教育を論じることに対するロレンスの姿勢が読み取れるように思われる。

以下、彼の論点を三つの角度から論じてみようと思う。一つは彼の意識論、第二は、人間の理想的存在状態に関する彼の見方、そして第三は、以上の点と教育に対する彼の提言との関連性、及びその提言の具体性と有効性である。

I

人間の意識についての思索はロレンス思想の中核をなすといっても過言ではなく、ジャンルを問わず多くの作品にこれへの言及が見られる。彼の意識論は例によって二元論的で、人間は二つの別種の意識を持つとし、その両者をそれぞれ＜知的意識＞（“mental consciousness”）と＜血の意識＞（“blood consciousness”）という言葉で代表させている。彼の意識論の焦点の一つは、この二つの意識がいかにもその本来果たすべき機能を失っているかということで、これを大まかに要約すれば、＜知的意識＞が肥大して＜血の意識＞をおびやかす、ないしは圧迫して機能不全に陥らせている、と言っているであろう。

第三章で彼は、風呂に一人入った子供が、「好奇心」という形で現れる＜知的意識＞のおもむくままに、石鹼を口にいれ、目にすりこんで、惨めな状態に陥る様を述べ、それを動物の「すばらしく純粋な好奇心」（“wonderful naive curiosity”）（p. 604）と比較して、これを人間のみに見られる悲惨であるとしている。なぜこういったことが起きるかということ、人間はある考え、観念を抱くと、どうしてもそれを実行に移さずにはいられないからである。（“And he can't help acting on his idea, no matter what the consequences” [p. 604].）しか

も悪いことには、この観念は、その人間の真の欲求あるいは必要とは何の関係もないのである。換言すれば、人間の知的意識は＜観念の自動性＞（“automatism of ideas”）とも言うべきものを持っており、まさにこの自動性が上記のような悲惨な状態を引き起こすのだと言う。そしてロレンスはこの知的意識を＜苦い責任＞（“bitter responsibility”）と呼ぶのである。

さらにロレンスはこう続ける。

Anyhow, it is criminal to expect children to “express themselves” and to bring themselves up. They will eat the soap and pour the treacle on their hair and put their fingers in the candle flame, in the acts of physical self-expression, and in the wildness of spiritual self-expression they will just go to pieces. All because, really, they have enough mental intelligence to obliterate their instinctive intelligence and to send them to destruction. A little animal that can crawl will manage to live, if abandoned. Abandon a child of five years and it won't merely die, it will almost certainly maim and kill itself. This mental consciousness we are born with is the most double-edged blessing of all, and grown-ups must spend years and years guarding their children from the disastrous effects of this blessing. (pp. 604-5)

ここには、ロレンスの意識論の中でも最も冷徹な部分が凝縮されていると言っている。というのも、彼が意識を論じると、＜知的意識＞の批判と＜血の意識＞の擁護という決まりきった図式にはまることが多いのであるが、ここでははっきりと、＜知的意識＞を、人間にさずけられた恩恵の中でも最も＜両刃の剣＞的なものであると認め、これを何とかその本来の機能に立ち帰らせようとする能動的姿勢がうかがえるからである。

第五章ではさらに歩を進めて、

Man is given mental intelligence in order that he may effect quick changes, quick readjustments, preserving himself alive and integral through a myriad environments and adverse circumstances which would exterminate a non-adaptable animal. (pp. 614-15)

とまで言っている。これは彼の＜知的意識＞に関する言及としては異例のもの

で、このように＜知的意識＞に積極的意義を見ようとする言葉は、彼の全作品を通して決して多くはない。これはたとえば、同時代のまったく対蹠的立場にあった思想家 Bertrand Russel の次の言葉をほうふつとさせる。

Of Bergson's theory that intellect is a purely practical faculty, developed in the struggle for survival, and not a source of true beliefs, we may say, first, that it is only through intellect that we know of the struggles for survival and of the biological ancestry of man . . . The fact is, of course, that both intuition and intellect have been developed because they are useful, and that, speaking broadly, they are useful when they give truth and harmful when they give falsehood. Intellect, in civilized man, like artistic capacity, has occasionally been developed beyond the point where it is useful to the individual; intuition, on the other hand, seems on the whole to diminish as civilization increases. It is greater, as a rule, in children than in adults, in the uneducated than in the educated. Probably in dogs it exceeds anything to be found in human beings. But those who see in these facts a recommendation of intuition ought to return to running wild in the woods, dyeing themselves with woad and living on hips and haws.⁽³⁾

ここに引いた二人の言葉には、現代人における本能あるいは＜血の意識＞の衰退を認めながらも、知性あるいは＜知的意識＞の役割をも積極的に評価しようとしている点で同質のものが認められる。1924年にニュー・メキシコで書かれた“Pan in America”に見られる次の言葉は、表現そのものでラッセルのそれと著しい類似を示している。“And we cannot return to the primitive life, to live in tepees and hunt with bows and arrows.”⁽⁴⁾ ロレンスとラッセルとの確執はよく知られたところで、二人の思想は基本的には異質のものであると言わざるをえないが、その二人にこのような同種の表現が見られるのは興味深い。

＜知的意識＞を“double-edged blessing”と捉えているのは、ロレンスの、そしてラッセルの慧眼と言うべきであろう。＜知的意識＞の特徴はその比較・対比・分析能力、そしてそれを土台とした論理的組立能力にある。G. I. Gurdjieff は「思考機能は常に比較という方法によって働くと言っていいだろう。知的結論は常に二つないしそれ以上の印象の結果なのだ」⁽⁵⁾と言っているが、確かにわれわれはある問題を前にすると、それをさまざまな角度から検討し、必要

とあれば部分に分解し、それをさらに細かく分析し、それぞれに最良の解決法を見出し、それらを総合して最終的な解決策を決定する。このプロセスはすべて＜知的意識＞によるものと言っていい。

しかし、ロレンスもラッセルもグルジェフも、この＜知的意識＞が唯一の意識でないという点では一致している。ロレンスは上記のように、＜知的意識＞を肯定的に評価している反面、その限界もはっきりと認識している。

The mental cognition or consciousness is, as it were, distilled or telegraphed from the primal consciousness into a sort of written, final script, in the brain. (p. 628)

要するに、＜知的意識＞は、彼が“primal consciousness”と呼ぶもの（これはほぼ＜血の意識＞と考えていい）から出てくる真の欲求、欲望を知覚に書き留めるだけの、いわば「従」の機能を果たすにすぎず、またそうあるべきだと言っているのである。ところがこの＜知的意識＞は、本来の機能から大きく逸脱し、あるいはこれをはるかに越えて膨張し、本来すべきでないことまでやるようになってしまった、というのがロレンスの主張である。彼はそれをまた次のようにも述べている。

Yet we presume to limit the potent spontaneous consciousness to the poor limits of the mental consciousness. In us, instead of our life issuing spontaneously at the great affective centres, the mind, the mental consciousness, grown unwieldy, turns round upon the primary affective centres, seizes control, and proceeds to evoke our primal motions and emotions, didactically. The mind subtly, without knowing, provokes and dictates our own feelings and impulses. That is to say, a man helplessly and unconsciously causes from his mind every one of his own important reactions at the great affective centres. He can't help himself. It isn't his own fault.

The old polarity has broken down. The primal centres collapsed from their original spontaneity, they have become subordinate, neuter, negative, waiting for the mind's provocation, waiting to be worked according to some secondary idea. Thus arises our pseudo-spontaneous modern living.

.....

Why does this happen ? Because we have become too conscious? Not at all. Merely because we have become too fixedly conscious. We have limited our consciousness, tethered it to a few great ideas, like a goat to a post. We insist over and over again on what we know from one mere centre of ourselves, the mental centre. We insist that we are essentially spirit, that we are ideal beings, conscious personalities, mental creatures. As far as ever possible we have resisted the independence of the great affective centres. We have struggled for some thousands of years, not only to get our passions under control, but absolutely to eliminate certain passions, and to give all passions an ideal nature. (pp. 629-30)

長い引用になったが、論旨はきわめて明瞭である。すなわち、人間の中では“primal centres”が“subordinate, neuter, negative”になり果て、“mind’s provocation”を待って動く、つまり本来「主」であるべきものが「従」になって、主-従関係が逆転しており、これがわれわれ現代人の生活すべてを“pseudo-spontaneous”にしている、と言うのである。

ここで注目すべきは、彼がこのような状態を、“He can’t help himself. It isn’t his own fault”と捉えている点、すなわちこれを人類全体が患っている宿痾だと考えている点、そしてさらに重要なのは、このような状態の原因を、われわれが意識的になりすぎたからではなく、むしろ自らの意識を狭めて、あるいくつかの観念にしばりつけてしまったことに求めている点である。第二の点について、彼はさらにこう言う。

We don’t find fault with mental consciousness, the daylight consciousness of mankind. Not at all. We only find fault with the One-and-Allness which is attributed to it. (p. 636)

この状態を一口で言うなら、「知的意識の独裁」と言っていいただろう。ここでも、ロレンスのこの指摘は注目に値する。なぜなら、前にも述べたように、彼の筆は＜知的意識＞の一方的批判に傾くことが多く、それもしばしば激烈なものとなり、上記の引用に見られるようなバランス感覚を失いがちだからである。問題は＜知的意識＞そのものにあるのではなく、人間の中のその位置と働きにこそ、そして他の意識との関係の中にこそあるのだという指摘は、ロレンスの

意識論を論じる上で、いくら強調してもしすぎることはないであろう。ロレンスが＜血の意識＞のみを擁護し、＜知的意識＞を不当におとしめているという印象を時に与えるのは、実は彼自身にも責任があるのだが、彼の意識論の根底には、このような冷徹な認識が見られるのである。

以上に見てきたような人間の意識観が、ロレンスの教育論の出発点である。すなわち、現時点での教育の目的は、さきに述べた主従関係の逆転を元に戻すことにあるとするのである。これを彼は次のような言葉で述べている。

At least, education and growing up is supposed to be a process of learning to escape the automatism of ideas, to live direct from spontaneous, vital centre of oneself. (p. 604)

We've got to try to educate them [children] to that point where at last there will be perfect correspondence between the spontaneous, yearning, impulsive-desirous soul and the automatic mind which runs on little wheels of ideas. And this is the hardest job we could possibly set ourselves. For man just doesn't know how to interpret his own soul-promptings, and therefore he sets up a complicated arrangement of ideas and ideals and works himself automatically till he works himself into the grave or the lunatic-asylum. (p. 605)

すなわち、人間の内部は「自発的・独創的な魂」と「自動的な知性」とに分裂しており、これに「完璧なる関係・均衡」をもたらすのが、換言すれば、魂の欲求を知性が理解できるようにすることが教育の本来の目的である、と言うのである。

これを実現するための方法として、ロレンスはいくつかの提言をしているが、それを検討する前に、彼の意識論のもう一つの側面、それも、その弱点と思われるものを見ておかななくてはならない。

この側面を明確にするには、Ken Wilber の「前／超の虚偽」(“pre/trans fallacy”) という仮説を援用するのが有効であると思う。ウィルバー自身の言葉を見よう。

まず、実際に人間が、三つの存在と知の一般的領域——感覚的、心的、精神

的靈的領域——を活用しうる能力を持っている、と仮定してみよう。これら三つの領域は、いかようにでも言い換えが可能である。無意識—自己意識—超意識、前合理的—合理的—超合理的、前個的一个的—超個的など。問題は、たとえば、前合理的と超合理的は、いずれもそれぞれ独特の意味で非合理的であるため、未熟な目にはそれらが同様なもの⁽⁶⁾に見えたり、時には同一のものにすら見えるということにほかならない。

ウィルバーは、自らがその旗手とみなされている超個人心理学（Transpersonal Psychologies）独特の用語を使っているので、この引用には多少説明を要するかも知れない。たとえば前意識とは、未だ自己意識（個的意識）が生じていない、すなわち、自己を「個」として、他の存在とは別の個体であると感じていない状態で、最良の例は乳児に見ることができ、また群れをなして生存する動物、たとえば蟻なども個的意識をもっていないとされる。

自己意識とは、自らを他の存在とは区別された存在として知覚する意識、つまりわれわれが通常持っていると言われる意識である。

超意識は、たとえば幻視家や神秘家が持っていると言われるような特殊な形態の意識、事物をあるがままに捉えることができる非日常的、あるいは超日常的の意識で、Maurice Bucke はこれを「宇宙意識」（“Cosmic Consciousness”）と呼び、Abraham Maslow はこの意識が生じる例外的な体験を「至高体験」（“Peak-Experiences”）と呼んだ。William Blake の一連の著作はほとんどすべてこのような状態を表現していると見ることができる。その状態における人間の知覚を彼は次のように述べる。

To see a World in a Grain of Sand
And a Heaven in a Wild Flower
Hold Infinity in the palm of your hand⁽⁷⁾
And Eternity in an hour

このように、遙か遠い昔から、神秘家とか幻視家とか呼ばれる人々が飽かず述べてきたこの状態、すなわち、自分と世界とを、一点の曇りもなく、その隅々まで見通し、理解し、把握していると感じる意識、これを超意識と呼んでいいであろう。本論でのロレンスの言葉をかりるなら、＜知的意識＞と＜血の意識＞とがそれぞれの分を果たしながら完全な均衡を保っている状態、あるいは、

＜自発的・独創的な魂＞と＜自動的な知性＞が完全な意思疎通を行っている状態とも言えよう。

この均衡を説くロレンスは、しかし同時にウィルバーの言う「前/超の虚偽」に陥っているのではないか。たとえば彼はこう言う。

We know this is all wrong, because, having met a rabbit or two, we have seen quite clearly that each separate rabbit was a separate, distinct rabbit-individual, with a specific nature of his own. We should be sorry to attribute a mind to him. But he has consciousness, and quite an individual consciousness too. (p. 619)

ウサギが生物学的、あるいは生理学的に意識を持っているかどうかはここでは問題ではない。要点は、たとえウサギが意識を持っているとしても、それは人間の＜自己意識＞とは非常に違う何物かである、ということだ。これは、個々のウサギが「独自の性質」を持っているかどうかということにさえ関係がない。ここでロレンスが見逃していると思われるのは、上に述べた意識の三段階（これは、意識が文字どおり三段階であると言う意味ではなく、意識の発達を図式化したものにすぎない）に当てはめてみると、ウサギの意識は明らかに＜前意識＞あるいは＜無意識＞と呼ばれるものに属し、人間のそれは＜個的意識＞に属するということである。

意識の発達ないしは意識の段階という考え方は、あるいは一般的に受け入れられていないかも知れないが、ここで言う段階とは、たとえば、蟻の意識と人間の意識が同レベルにあると考えるのは困難で、それと同様に、すべての人間が同じ意識のレベルにあると考えるのも困難である、ということから推論されるような段階を指す。ロレンス自身、このことは部分的には明確に認識し、また繰り返し強調している。“In no sense whatever are men actually equal” (p. 600). “Every man, when he is incontestably himself, is single, incomparable, beyond compare. But to deduce from this that all men are equal is a sheer false deduction: a simple *non sequitur*” (p. 603). このように人間の違いは明確に認識していたロレンスは、しかしその段階的人間観を、人間と動物との間にはなぜか適用しない。それどころか、動物が持っていると彼が考える「無垢」を、人間の持つ自己意識よりも高次のものとみなしてさえる。つまりロレンスの陥っている陥穽は、たとえば動物に典型的にみられるような意識の前段階を、

あたかも超越的段階に達した意識であるかのように捉えていること、ウィルバーの言葉を借りれば、「前個的領域を疑似超個的状态に昇格⁽⁸⁾」させていることであると言えよう。

前にも見たように、人間は＜知性＞と＜本能＞（ラッセル）、＜知的意識＞と＜血の意識＞（ロレンス）、あるいは＜思考センター＞と＜感情センター＞（グルジェフ）を持っており、それぞれが違う機能を果たしている、もしくは果たさなくてはならない。どちらかが他の機能に踏み込んだり、さらには一方が他方の機能を完全に抑え込んだりするようになると、人間はきわめて悲惨な状態に陥る。どちらかが他方より優れているのではなく、双方が本来の機能を果たすことこそが肝要なのだ。ロレンスもこのことは十分に認めている。しかしそうしながら、知的意識、少なくとも人間のそれと同レベルの知的意識は持っていない動物の生存形態を美化することに、いや、そうせざるをえないところに彼の根本的な誤謬がある。人間の中でこの二つの意識が正常に機能していないという点を認めるまではいいが、それを押し進めて、「前」意識しか持っていない動物、あるいは自然の状態により近いと彼が感じた人間、たとえば農夫やジプシーや森番を、あたかも「超」意識を持っているかのように描くこと、あるいは「超」意識とは言わないまでも、あたかも＜知的意識＞と＜血の意識＞とが調和を保っているかのように描くこと、ここに問題がある。

もちろん彼も、＜知的意識＞が未発達の状態が望ましいわけではないことは認識していた。

You may, like Yeats, admire the simpleton, and call him God's Fool. But for me the village idiot is a cold egg. . . . Man can't live by instinct, because he's got a mind. . . . Man has a mind and ideas, so it is just puerile to sigh for innocence and naive spontaneity. Man is never spontaneous.⁽⁹⁾

これは最晩年のエッセイ “On Human Destiny” に見られるものだが、しかしこのような表現は決して多くはなく、むしろこれとは逆に、動物やある種の人間の「無垢」な状態、そしてそれが生み出す独特の力と美を説いて倦むことがない。典型的な例は *The Lost Girl* の Cicio、“The Virgin and the Gypsy” のジプシー、“St Mawr” の同名の馬などに見ることができる。たとえば Cicio がどのような＜知的意識＞を持っているかにはほとんど言及がない。彼の、おそらくは＜血の意識＞が生み出すのであろう「暗い美」が、恐るべき力で Alvina

に襲いかかり、彼女がそれまで自己だと信じていた表層の自我を突き破って、彼女が真の自己を見いだす触媒の役目を果たすのである。ここにおいては、Cicio の＜知的意識＞はもちろん、彼の内部での二つの意識の関係もまったく問題にされていない。しかしここで重要なことは、この小説が含意している、あるいは少なくとも読者の大多数がそう受け取るであろうところの観念である。すなわち、＜知的意識＞のあまり発達していない Cicio のような人物こそが、強い、あるいは望ましい＜血の意識＞を持っており、それが特殊な力と美とを生み出しているのだ、というふうに多くの読者が受け取るならば、あるいはロレンス自身がそれを意図していたとするならば、彼はまさにこの「前／超の虚偽」に陥っていたことになる。なぜなら、超越的意識は、いかにその形態が前個の意識に似ていようとも、あくまで別物だからである。この点について、ウィルバーはこう言う。

…自我の発生とともに、精神は阻害の頂点に達したかのように見える。だが、実際には、自我の発生によって、精神は帰途についたのだ。それは自然の前個的な無意識から出て精神の個的な自己意識へと向かったのである。精神への中宿にあたる自我が、すでに墮落している存在状態を自覚できる最初の知的構造であると言う事実が、実際には治癒への途上にあるにもかかわらず、誤って自我が病そのものの原因であるかのように思わせてしまうのである。⁽¹⁰⁾

この点をさらに明確にするために、ウィルバーがその著書に引いている二人の思想家の言葉を引用しておこう。最初はメハー・ババの言葉である。

自我は消滅するために生じ、魂の長旅では無用の長物である、と考えるのは誤りであろう。精神的霊的努力によって自我を超越し、自我を越えて成長することが可能であるところから、自我は永続的なものではないが、自我形成の局面は一時的に必要なものとみなされなければならない。⁽¹¹⁾

次はベルジャーエフの言葉。

楽園の条件は無知ということであった。それは無意識の世界であったといえる。…楽園では人間の自由はまだ実現されていなかった。…人間はそこで楽

園の至福を捨てて宇宙の中の苦悩と悲劇を選び自らの運命を究極まで追求することになった。これが人間意識の誕生であった。その後の人間はものごとを判別したり評価するようになり、知恵の木の実を食して善と悪のまえに立たされた。禁断の知恵の実を食べることによって人間は非合理の暗がりから出て自由の身となったが、それは無知の中の幸せを捨てて死と分別という苦しみを抱え込むという行為でもあった。…（知恵を身につけたことは）恥ずべきことではなくむしろ高みに昇る行為であった。人間の偉大さの証明であった。⁽¹²⁾

彼らの指摘しているのは、人間が＜知的意識＞を持つに至ったのはまさに恩恵と言うべきであり、それが現在 “double-edged blessing” にとどまっているのは、人間が未だそれを十分に発達させていないからにほかならず、現在陥っている苦境ゆえに、＜知的意識＞の存在そのものを否定的に考えるのは誤りだということである。前に引いたブレイクは、この点に関しても実に鋭い洞察を示している。

Unorganiz'd Innocence : An Impossibility.
Innocence dwells with Wisdom, but never with Ignorance.⁽¹³⁾

Thought is life
And strength & breath;
But the want⁽¹⁴⁾
Of Thought is death.

⁽¹⁵⁾
The Eye sees more than Heart knows.

ロレンスとはほぼ同時代を生きた霊的思想家 Rudolf Steiner も、「人間は思考存在なのであって、思考から出発するときのみ、自分の歩む認識の小道を自分で見つけだすことができる…思考こそ感覚的世界で行使しうる能力で最高の能力である」と言明している。またこの時代、シュタイナーを初めとする多くの思想家と話し、それを克明に記録した Rom Landou はこう書いている。

Rudolf Steiner's doctrine that man's mind cannot be ill because it is of a di-

vine nature and that only the body in which the mind is placed can be responsible for the disease, produced new methods in the treatment of mental disturbances.⁽¹⁷⁾

同じ著書の中で彼は、現代インドの聖賢 J. Krishnamurti の言葉も記録している。

"It is not the subject of your thought that matters so much as the quality of your thinking. Try to complete a thought instead of vanishing it, and your mind becomes a wonderful creative instrument instead of a battlefield of competing thoughts."⁽¹⁸⁾

ここに引用した人たちの見方を、再びウィルバーの言葉をかりて要約すればこうなるだろう。「人は実際に自我—論理から自由になることができる。しかし、そのためにはまず、自我—論理を自由に使いこなせるようになっていなければならない。」⁽¹⁹⁾ また、グルジェフの高弟の一人であった Maurice Nicoll は、グルジェフの思想および行法を“second education”と呼び、これを受けるためには“first education”⁽²⁰⁾、つまり人生経験を経て自我を作り上げることが必要不可欠だという。

こうした見方に比べて、ロレンスの＜知的意識＞に対する考えは、時代によってかなりの振幅がみられる。たとえば中期に書かれたエッセイ、*Psychoanalysis and the Unconscious* にはこうある。

Ideas are the dry, unliving, insentient plumage which intervenes between us and the circumbient universe, forming at once an insulator and an instrument for the subduing of the universe. The mind is the instrument of instruments; it is not a creative reality. . . . The mind is the dead end of life.⁽²¹⁾

しかしその約二年前に書かれた“Education of the People”には、すでに見たようにこうある。“We don't find fault with the mental consciousness, the daylight consciousness of mankind. Not at all” (p. 636). このような振幅が起きるのは、さきに引いた人たちが述べ、ウィルバーが簡潔に要約していた異なるレベルに属する意識の間の関係を、ロレンスがはっきりと認識していなかったか

らではなかろうか。意識、あるいは広く人間と言ってもよいが、その発達の前段階と超越的段階とは、どちらもその特徴を無垢、自由とする点で酷似しているが（たとえば幼児と聖者）、それらは自ずから別のレベルに属する無垢と自由である。さらに事態を混乱させているのは、両者の中間段階にある人間、すなわち大半の人間は、その存在を悲慘と苦しみの連続と感じるか、ないしはまったく機械的、盲目的に、まさに生に流されていく。そして、この段階を何とか脱しようとするものは、つい前段階への退行を夢見るか、あるいはこの退行を超越的段階への参入と混同しがちである。人間の道は前方にしか開いておらず、現在の状況を突破してさらなる発展を遂げるしか道はないのだが、大半の人間にはこれが理解できず、幼児的な退行、あるいはロマン的な「高貴な野蛮人」といった類のものが問題の解決法に見えるのである。

ヘルマン・ヘッセは『荒野の狼』の中でこの点を深く考察しているが、彼のたどりついた洞察も同じ方向を指している。

狼にであれ、子供にであれ、およそ背後へ人間を連れ戻す道などというものは、あるはずのものではありません。またおよそことの始源に純真さと単一があったということも真理ではありません。すべて創られたものは、たとえどのように単純なものに見えたとしても、もう原罪であり、分裂であり、もう生成という汚れた流れの中に投げ込まれ、永久に永劫に流れを遡る術をもつものではありません。純真への道、創られぬ以前へ、神への道は背後へ導いて行くのではなく、実は突進することです。狼や子供にかえることではなく、いよいよ深く罪⁽²²⁾に塗れ、いよいよ深く人間完成の中に徹することの中にあります。

<知的意識>あるいは自意識という言葉こそ使っていないが、ヘッセがそれを念頭においてこの本を書いたのは明らかである。主人公ハリー・ハラーは何よりもまず自意識に悩まされる人物として登場する。彼が放浪の果てにたどりつく「魔法劇場」の入場料は「理性（知性）」であった。それを払って中に入った彼は、人間意識の万華鏡ともいべきものを見るが、最後に到達する境地をヘッセはこう書いている。「喜んで私はその将棋をもう一度さしてみたい気がする。その苦しみをもう一度味わってみようではないか、その無意味さの前にもう一度戦慄し、私の心の中に潜んでいる地獄の中を、もう一度、いや、なんどでもくり返しさまよって行きたい気がするのだ。」⁽²³⁾たとえ人間の現状が苦渋

に満ちたものであろうとも、それをもたらした原因を＜知的意識＞とそれが生み出す自意識とにすべて帰するのではなく、その意識をさらに完全なものにすることによって、いったん失われた、＜血の意識＞、本能、直感などとの均衡を取り戻さなくてはならない。その途上で人間は、ハラーが通り抜けたような苦しみを味わうだろうが、それをもって＜知的意識＞弾劾の理由にするのではなく、ヘルミーネやパブロに象徴される高次の意識へと進むことによってこの苦境を克服しなければならない。人間の目指すべきは「幼児的無垢」ではなく、[聖者的無垢]あるいは「意識的自然さ」とでもいうべきものである。人間の現状の突破口は、決してロレンスがここに書いているような“*No more seeing ourselves*”あるいは“*Let go the upper consciousness*” (p. 633) といった態度にあるのではなく、より深く、冷徹に自分を見つめることに存するのである。

II

次に、第二点として、人間の理想的存在様態に関するロレンスの考えを検討してみたいが、これは、上に論じた彼の意識観と密接に関連している。ここでは、“*Education of the People*”で大きく取り上げられている二つの点、すなわち、人間は一個の孤立した存在であるという点、そして人間はみな不平等であるという点を中心に考察してみたい。

まず人間の平等性という点から見てみよう。すでに引用した文章からも明らかなように、ロレンスはこのエッセイで、人間は平等であるという観念に真っ向から攻撃を加えている。すなわち、人間は平等という観念ないし理想を抱いたがために、個々の人間がそれぞれに独自で、比較を超えた存在であるという根本的な真理を見失ってしまったと言うのである。人間はあらゆる点で違っており、そしてその違いを認識し、尊重すべきなのに、その事実に平等という観念を無理やり押しつけて、違いがまるで存在していないかのように振る舞っていると言う。

The small are as perfect as the great, because each is itself and in its own place. But the great are none the less the great, the small the small. And the joy of each is that it is so. (p. 603)

彼にとっては、さまざまに違うそれぞれの存在物がそれ本来の位置にいること

が純粋な喜びであり、そしてその違いを認識することが何よりも大事なのであって、どちらが優れておりまた劣っているかということは二義的な重要性を持つにすぎない。その主張自体はよくわかるのだが、それよりもっとわれわれの興味を引くのは、ここでロレンスが図らずも、ウィルバーのもう一つの重要な概念である「カテゴリー・エラー」を人間が犯していることを指摘していることである。

「カテゴリー・エラー」とは、「前／超の虚偽」を含む上位概念で、それぞれのカテゴリー内では正しい考えでも、それを別のカテゴリーの中に置くと、あるいはそもそもカテゴリーというものを無視して論じると、必然的に誤りとなる、という考え方である。本論に即して言うところなるだろう。もしカテゴリーというものははっきり意識しないで論じるならば、人間存在に関する二つの事実は、完全に対立しあったままで、何等の妥協点も見いだせないだろう。その二つの事実とは、ここでロレンスが強調している、人間はすべて独自の孤立した存在であるということ、および、人間は一個の存在として、それぞれが在るべき本来の場所にいる限り、たとえて言えば「神の前では」、その独自性や違いとは無関係にすべて平等である、ということである。“Education of the People”の中ではロレンスは、前者ばかりを強調しているように見えるかもしれないが、すぐ上に引いた箇所に込められている考えは後者も含んでいるように思われる。

ここで興味深いのは、ロレンス自身こうしたカテゴリーをほとんど意識せずに論じており、「カテゴリー・エラー」に陥りかけているのだが、それが逆に、われわれが一般に犯している「カテゴリー・エラー」を見事に浮き彫りにしている点である。繰り返しになるが、人間はすべて独自の存在で、個々人それぞれ違っているというのは事実であり、また、人間は、まさにその独自性のゆえにみな平等であるというのも事実である。両者の言明においては、「平等」という言葉の意味が違う、といってもいいが、やはりそれよりは、両者は別のカテゴリーに属する事実と考える方が適切であろう。両者はそれぞれのカテゴリーにおいては真であり、決して互いに矛盾しはしない。誤解や混乱が生じるのは、双方をあたかも一つのレベル、一つのカテゴリーに属するものとして互いに突き合わせ、論理的に整合性を持たせようとする時である。そうすること自体が誤りなのだから、そこから出てくる結論に矛盾があるのは必然である。

「カテゴリー・エラー」という観点からみると、ロレンス犯している過ちは明らかにになる。

Is the man your equal, your inferior, your superior? He can't be, if there is no comparison. If there is no comparison, he is the incomparable. He is the incomparable. He is single. He is himself. (p. 602)

こう言明しておきながら、ここから彼は “Doubtless there is inequality between the two [men]. But there is no sense of inequality” (p. 603) と論を続ける。比較しなければそもそも平等ということもないのだと言いながらも、やはり不平等は存するのだという。これは、当人が感じる (sense) かどうかといった問題ではない。人間が “incomparable” で “single” であるということは、このカテゴリーにおいては平等、不平等という概念そのものが不適切な、用をなさないものだということにほかならない。それをロレンスは、一方の事実を表明しながら、同時に別のカテゴリーに属する事実をあたかも同一カテゴリーに属するものであるかのように説き続けるのである。

しかし、以上のような「カテゴリー・エラー」は犯しているにしても、人間の能力や独自性といったカテゴリーにおける彼の指摘には、注目すべきものが多い。彼の指摘は、図らずも、教育に関わる者の多くが、彼が犯しているのと同じく反対のカテゴリー・エラーを犯していることを明らかにする。すなわち彼らは、平等という観念・理想を盲目的に重んじるあまり、個々人の性格や能力の差異という歴然たる事実に関心を失い、あるいは前者を後者に無理やり押しつけており、そのため教育はその本来の目的をまったく果たしていない、ということである。

この考えを押し進めるロレンスは、さらに次のような瞠目すべき発言をしている。

And therefore there will always be the vast, living masses of mankind, incoherent and almost expressionless by themselves, carried to perfect expression in the great individuals of their race and time. As the leaves of a tree accumulated towards blossom, so will the great bulk of mankind at all time accumulate towards its leaders. We don't want to turn every leaf of an apple tree into a flower. And so why should we want to turn every individual human being into a unit of complete expression? Why should it be our goal to turn every coal-miner into a Shelley or a Parnell? We can't do either. Coal-miners are consummated in a Parnell, and Parnells are consum-

mated in a Shelley. That is how life takes its way: rising as a volcano rises to an apex, not in a countless multiplicity of small issues. (p. 609)

これは現代の教育者にとってはきわめて衝撃的な言葉だと言わねばならない。ロレンスの論旨は明快である。人間が本来生まれながらに持っている潜在能力には明らかに差があるのであり、それを無視して、全員をシェリーやパーネルのような人物に仕立てあげようとするのは、生の事実と根本的に矛盾する。この矛盾に気がつかないか、あるいは気づいても見えないふりをしているために、教育者はこの矛盾に引き裂かれ、身動きとれない状態に陥っている。人間はみながみなシェリーやパーネルにはなれず、またなる必要もない。しかし、誤った平等観、そしてそれを社会に適用した民主主義なるものが誕生して以来、みながみなシェリーやパーネルになれるし、またならなくてはいけないというのが、教育の至上目的になってしまったのである。

ここでわれわれは考え込まざるをえない。現在でもかなりの程度階級的な社会形態を残し、教育にもそれが反映しているとされる英国、しかもロレンスの当時は今よりもはるかに階級が確固たる存在であった英国に対してさえこのように激烈な批判が行われうるのであれば、現在の日本に対してはいったい何を言うべきであろうか、と。内から生じたものでない平等および民主主義という観念は、それゆえこの国では一種純粹培養的にはぐくまれ、きわめて特殊な、「箱いり娘」的な民主主義が誕生した。この民主主義の特徴はその純理論的ともいえる純粹性であるが、この純粹性は、文字どおり両刃の剣である。国民の大半が階級のほとんどない社会と感ぜられるような国を作り上げたという意味では、この民主主義の「功」は認めざるをえないが、一方、ここでロレンスが論じているような問題、及びそれから生じる矛盾にはからきし弱く、いつまでたっても、この能力差という厳然たる事実と真正面から向き合い、これに対処することができないという点において、その「罪」の側面は、すぐれて今日的な問題としてわれわれの目の前にその姿を現している。

ここでは日本の教育問題を論じるのが主旨ではないので、それを論ずる際にもロレンスの指摘は多くの場合きわめて示唆的であると言うにとどめて、本論に戻ろう。(これについてはⅢで考察したい。)

上に引いたような信念に立つ彼は、社会形態としての階級に対してもここでは肯定的な評価を下している。“There must be a system; there *must* be classes of men; there *must* be differentiation . . .” (p. 611) これは、階級社会という当

時の英国の状況に終生苦しみ、自らがその中に生まれた労働者階級にも、むしろ上流階級にも、そして知識人階級という特殊な層にも違和感を抱き続けた彼の発言としては意外にも思えるが、彼の人間観と社会観からすればむしろ論理的必然でさえある。こうした信念を抱く彼にとって、俗に解釈されている民主主義などとうてい容認できるものではない。彼によれば、

The true democracy is that in which a people gradually cumulate, from the vast base of the populace upwards through the zones of life and understanding to the summit where the great man, or the most perfect utterance, is alone. (p. 609)

このような表現が、ロレンスをファシストと決めつけるような見方の温床になったことは否めないが、もちろん彼が言っているのは、本質的にファシズムや全体主義とは違うものだ。これはむしろ、「真の民主主義」などと呼ばずに、言葉の真の意味での「貴族制」、あるいは精神的階級社会といった方が誤解が少ないのではないか。少なくとも、現在論じられ、あるいは信じられている「真の民主主義」が、ロレンスの説くそれと一致することはまずあるまい。

すべての人間がシェリーやパーネルになれると信じる者はあるまい。厳密に言えば、日本をはじめ多くの国で行われている「民主主義的」教育も、決してすべての生徒を詩人や英雄にしようとしているわけではない。その目標としているところは、実はロレンスがここで論じている教育の目標とかなり近いのではあるまいか。すわち適材適所である。しかしそれはあくまで目標であって、その実態は、少なくとも日本に限って言えば、はっきり異なっていると言っている。すべての者に平等、ないしはかなり平等に近い機会と可能性が与えられたのは「民主主義的教育」の最大の功績と断言するが、その反面で、機会が平等であることが、あたかもその機会を享受する者までもが平等であるといった幻想を育ててきたのではないか。能力差、個性というものを本当に認め、尊重するならば、すべての生徒に同じ教育を施し、また同等の結果を期待するということが起こるはずはない。しかしそれが現在、日本を初めとする多くの国で起こっていることなのだ。

なぜか？ それは現代人が、あるいは近代人と言った方が正確かも知れないが、個性は認めつつも、能力の違いを認めることを極度に恐れるからにほかならない。ロレンスによれば、われわれは飢餓を、貧困を恐れている。その恐怖

は、せんじつめれば自己の存在自体に対する恐怖である。みながみな、能力差も、したがって競争もない「平和な」社会と生活を望んでいる。しかしこの「平和」は、人間の本性からいって不可能なものであり、さらに言えば、望ましいものでもない。われわれは競争と共存しうる平和、もっと言えば、健全な競争が生み出す平和を手に入れなくてはならない。競争が生み出す平和とは、能力差を自明のものとし、同時に、その能力差、個人差が、別のカテゴリーの事実である「神の前での」平等をまったく侵害しないような状態と言ってよかろう。換言すれば、能力差に自意識的に同一化しない状態、もっと分かりやすく言えば、能力差というものがあまりに自明であるために、あるいは、それを認めることが完全に自明の前提となっているために、能力を持つ者はそれをおごらず、持たない者もそのことで恥辱を感じることもない、そしてさらには、個々人はそれぞれ違った面に能力を持っていることを認める謙虚さを各人が有している状態、と言っていいであろう。

もちろんこれは、言うはやすく行うは難しいことである。しかし、なぜこれがそれほど困難であるかと言えば、実はわれわれが、能力というものを、かなり狭い範囲で、あるいはかなり限られた数の尺度で計っているからである。日本の場合、教育の場での能力といえば、端的に知的能力を指す。みな口では、人間にはさまざまな能力があるからそれを伸ばせばいいと言いながら、その実ほとんどの生徒が知的能力を伸ばすことにのみ専心している。これはもちろん彼らの責任ではなく、そのような言葉とは裏腹に、教師をはじめとする彼らの周りのすべての大人が、彼らにこの能力の発達を要求していることを痛いほどに感じるからこそそうしているのである。こうして教育の理想と実態とはますますかけ離れていき、ロレンスが描くとおりの完全な悪循環に陥っている。

これに関連するもう一つの彼の論点、すなわち、人間は本来個的存在であり、孤立しているべきであるのに、民主主義的教育はこれに真っ向から反対し、この人間の本来のあり方を破壊している、という点を検討してみたい。まず彼の言葉を聞こう。

One is one and all alone and ever more shall be so. . . . One draws near ; there is a thrill and a fiery contact. But never a merging. A withdrawal, a bond of knowledge, but no identification. Recognition across space: across a dark and bottomless space: two beings who recognize each other across the chasm, who occasionally cross and meet in a fiery contact, but who find

themselves invariably withdrawn afterwards, with dark, dasky-glowing faces glancing across the insuperable chasm which intervenes between two beings. (p. 634)

One is one, and as such, always more than an aggregation. Vitally, intensively, one human being is always more than six collective human beings. Because in the collectivity, what is gained in bulk or number is lost in intrinsic being. . . . One is more than many. The Japanese know that one flower is lovelier than many flowers. (p. 637)

There is no living oneness for two people: only a deadly oneness, of merged human beings. (p. 638)

この点に関するロレンスの発言には、時代によってこれと真っ向から対立するものもあるが、人間の「個」としての側面を何よりも重視した、特に中期に見られる局面では、この種の主張は一貫して行われる。これらの言葉の伝えんとするところはこうであろう。一個の人間の価値は計りがたいほどに重い。しかるに人間はそのことを忘却して自己を失い、徒らに集団の中に埋没し、それによって心の平安を得ているが、それは真の平安ではない。人間の出合いは、それぞれが個として孤立しているからこそ成立し、あるいは意味深いものになるのであるが、これを意味深いものにするためには、出合いの後に必ず双方が自らの場所に立ち帰り、決して一体となったままでいないことが必要だ。——この論が、他の時期に書かれた論、たとえば *Apocalypse* に見られるような、人間は宇宙という有機的全体の一部にすぎず、それを認識することこそが人間の未来を約束する、といった論とその主旨を異にしていることは明らかだが、実はこれら二つの見方は彼の中に常に共存していて、ある時は一方が、またある時は他方が真であると認識され、強く表現される、と見るのが正確であろう。

ここでロレンスが強調する人間の存在様態を理解するには、やはりカテゴリーという概念を導入するのが便利だろう。人間が個であり、孤立した存在だと言うのは、あるカテゴリーでは厳然たる事実である。しかしこのことは、人間が社会的、集団的な存在であることを否定するものではない。この両者は決して矛盾しているのではなく、別のカテゴリーに属する事実なのだ。前にも論じたように、両者はそれぞれのカテゴリーでは真実だが、これを同一のレベル、

カテゴリーで論じ始めるとき、両者の間に矛盾が見えてくる。しかしこの矛盾は幻影であり、そもそもこの両者を同一のカテゴリー内で論じようとする設定自体が間違っているのである。ロレンスはここでも「カテゴリー・エラー」を犯している、あるいは少なくとも犯しかけていると言わざるをえない。人間の存在様態の事実として「個」および「孤立」を指摘することは、それ自体何の誤りもない。しかしそれを過度に強調し、人間の社会的存在という側面（この重要性は彼自身、別のところで強調しているのだが）を否定、あるいはあたかも歪んだ存在様態であるかのように弾劾し始めるや、彼は罠に陥る。人間はどちらの側面も失ってはならない。いや、そもそも失うこと自体不可能なのだ。孤立しているのが本来の状態でもなければ、集団の中にいるのが本来の状態でもない。両者は相補的關係にあり、どちらが中心、あるいは主だとは言えないのである。

先にも述べたように、ロレンスは時期によって、人間の存在のこの両側面のある一方を他方よりも強調する嫌いがあるが、“Education of the People”を書いた時期には、人間の「個」的側面の強調はその頂点に達していたようである。“All communion, all love, and all communication, which is all consciousness, are but means to the perfected singleness of the individual being.” (p. 637) といった表現にそれは端的にうかがえる。“communion,” “love,” “communication” と、“the perfected singleness of the individual being” とは、どちらかがどちらかの「手段」であるといった関係ではない。両者は人間の存在様態の二つの側面にほかならず、より厳密に言うなら、人間の理想的存在様態を別の視点から見たものであり、主従の関係にあるのではない。しかし「個」を強調するロレンスには両者の関係が正確には見えていないようだ。

さらに、彼が強調する「個」および「孤立」ということ自体にも問題がある。再び「前／超の虚偽」を援用するなら、人間が孤立している状態にもやはり「前」、「個」、「超」の区別がある。「前」意識的な孤立とは、集団や人間一般に対する嫌悪、反発、軽蔑、ないしは自分が容れられないという苛立ちなどから、自分を集団から引き離し、あるいはしばしば見られることだが、引き離したような幻想に陥っている状態である。これは単なる「リアクション」にすぎず、孤立しているという感覚自体が幻想で、実際にはネガティヴな形でその集団に依存しているにすぎない。中間段階にある「個」的、あるいは自己意識的孤立は、われわれの大半が、あまり強くは意識していないがそれでもうすうす感じている状態、すなわち、自分が集団に依存しているという感覚と、一人である

という感覚とが同居している、あるいはその双方が交互に強くなるといった、かなり曖昧な日常的状態である。「超」意識的孤立は、これら二者とははっきり違って、自分が個体として孤立していることを完全に認識しながらも、同時に、いかに自分が、直接会うことも目にすることもない人々や動物、さらに広くは、宇宙の生きとし生けるものすべてを含んだ集団に多くを負っているかを、明瞭に意識している状態であろう。これは、ユングの言う「個体化」の過程が終了したときにたどりつく状態、あるいはグルジェフの言う「人間第7番」⁽²⁴⁾の意識状態と基本的に同類の状態と思われるが、ここに至っては、「個」と「集団」、「孤立」と「融合・一体化」という二元論自体が存在しなくなる。より正確に言えば、そのような二元論がそもそも幻影であったことが明瞭に認識されるはずである。

ロレンスがここで説いている「個」と「孤立」がどのカテゴリーに属するかはにわかに決め難いが、少なくとも、あまり明確な区別をしていないとだけは言えるであろう。上に引いた言葉に続けてこう言っている。

Which doesn't mean anarchy and disorder. . . . Neither does it mean what is nowadays called individualism. The so-called individualism is no more than a cheap egoism, every self-conscious little ego assuming unbounded rights to display his self-consciousness. (p. 637)

これは、ロレンスが、自らの説く立場を「前」意識的孤立の状態と区別するために言っていると取れようが、かといって、この著作から、彼が「超」意識的孤立をはっきりと意識していると考えすることはむずかしい。厳然たる二元論がそこにあるからだ。

III

前節では、“Education of the People”に見られるロレンスの人間観、とりわけ彼が理想的存在様態と考えるものを検討し、さらにその問題点を考察したが、ここでは彼の教育に関する提言を見、その有効性を検討してみよう。

これまで見てきたような意識観、人間観を持つロレンスが、教育について次のような発言をするのに何の不思議もない。

As a matter of fact, our private hope is that by a sane system of education we may release the coming generation from our own nasty disease of self-consciousness . . . (p. 627)

In the early years a child's education should be entirely non-mental. (p. 641)

The mental understanding of what is happening is quite unimportant to the job. If you are of an inquiring turn of mind, you can inquire afterwards. But while you are at the job, know what you're doing, and don't bother about understanding. Know by immediate sensual contact. . . . Busy, intent, absorbed work, forgetfulness, this is one of the joys of life. (p. 653)

What ails modern education is that it is trying to cram primal physical experience into mental activity—with the result of muddledness. . . .

If our consciousness is dual, and activity in duality: if our human activity is of two incompatible sorts, why try to make a mushy oneness of it? The *rapport* between the mental consciousness and the affective or physical consciousness is always a polarity of contradistinction. (pp. 654-55)

ここでロレンスが行っているのは、実は教育の現場で起こっているカテゴリー・エラーの指摘なのだ。すなわち、＜知的意識＞と＜血の意識＞とはそれぞれ持ち場があるのだから、教育においてもそれらをはっきりと区別して、双方の意識を適切に教育しなければならない。しかるに、現今では知的教育が偏重されていて、血の、もしくは肉体的意識には適切な働きかけが行われていない、と言うのである。前節において、自我を乗り越えるためにはまずしっかりとした自我を作り上げる必要がある、その点をロレンスは十分に認識していなかったのではないか、と論じたが、このしっかりとした自我を作り上げるためにも、ここで彼が行っている指摘は重要である。なぜなら、しっかりとした自我と二つの意識とは、両者への適切な教育があってはじめて生まれるものだからである。不適切な教育からは未熟な自我しか生まれず、未熟な自我ではそもそも自我の超克などできるはずがない。いや、自我の超克はむろんのこと、通常の人生を送ることさえおぼつかない。自我と未熟な自我との混同から生じる

醜さ、あるいは滑稽さについての J. D. Salinger の次の一節は、見事に核心を突いている。自我こそが諸悪の根元だと信じこむフラニーを、兄のブーイーはこうたしなめる。

いまここにあるのは神の宇宙だぜ、な、おい、おまえのじゃないんだから、なにが自我でなにが違うか、そのことで決定的なこと言えるのは神だけだ。…とにかく自我一般のことをキーキー言うのはやめろよ。おれに言わせりゃだよ、…この世の中の不潔さはな、半分は、自分のほんとの自我を使っていない連中の引き起こすものだ。おまえの言うタッパー教授を例にとってみろ。…そいつの使ってるもの、そいつの自我だとおまえが思ってるもの、それはぜんぜんそいつの自我なんかじゃなくて、なにか別のもの、ずっと汚くて、自我のような本質的な能力じゃないのさ。⁽²⁵⁾

ロレンスはこの教育論の冒頭で、ジミーとナンシーを登場させて、当時の教育界の陰うつな様子を皮肉たっぷりに描写し、そしてこう言う。“There is the profound cynicism of the laundry and the bottle-factory at the bottom of everything” (p. 589). つまり、あらゆるきれいごとや理想の下には、醜悪な現実が菌をむき出して子供達を待ちかまえていると言うのだ。このような現実に無意識の恐れを抱いている、生徒の大半を占める子供たちを、オックスフォード出身の上品な先生ののたまう高邁な理想などで縛りつけてはならない、と彼は言う。そんなことをすれば、真の自我が育たないばかりか、自意識過剰の、人の顔色を見るのと世渡りばかりがうまい、それでいて自分の存在には恐怖を抱いている、そのようなこすっからい人間を生み出すのが関の山である。そうならないように彼はいくつかの提言をするのだが、それらは基本的に次の三点に要約できる。一つは授業時間の短縮と放任主義、第二は職業訓練などの実習と体育の重視、そして第3は、校長を初めとする教師に強い権限を持たせ、彼らが責任を持って、生徒の適性を見きわめることである。

これらはすべて、ロレンス独自の提案ではないし、またことさらに目新しい案でもない。しかしともかく、その有効性を問うなら、ある具体的な場に適用してみるほかはない。筆者にとって知識的にそれができるのは現在の日本をおいてないので、日本の教育の現状に照らし合わせつつこれらの点を考えてみよう。これら三点は、現在日本が取っている方向とはほぼ正反対のものといってい

かと言えば、それが社会的な「仕切り」⁽²⁶⁾を生み出す上でもっとも便利かつ効果的だからである。いかなる社会においても、人間はそれぞれに具わった能力にしたがって「仕切り」、あるいは階層を構成する。前に、日本では多くの人が自らの社会を階層のない社会と感じていると書いたが、それは一つには、他の多くの社会に比べて階層間の距離がかなり近いのと、いま一つは、われわれがそれにあまり敏感にならないように教育され、かつ社会全体がそのように仕組まれているからであろう。

現在の日本の教育界での最大の問題の一つである大学教育にしても、多くの提言がなされながらなかなか実行に移されないのは、あるいは移されても実効をあげないのは、提言をする者も含めた大多数の人の中に、現在の安定した社会構造を揺るがすまいとする、それこそ階層を超えた暗黙の了解があるからだ⁽²⁷⁾としか思えない。西尾幹二はこの点を鋭く突いている。

日本では、実社会において人が生涯競争の辛さを免れるために、18才の時点に選抜の機能をあえて集中させているとさえ言えるのである。日本人は無意識に、実社会で一番責任の重い人間評価、人間選別をアメリカのように赤裸々に実行するのを避けるために、18才の青年にいっさいの責務を押しつけているのではないだろうか。それはひょっとしたら実社会の摩擦⁽²⁸⁾を予防するための、日本人の民族としての無言の智慧なのかもしれない。

きわめて冷利な観察であるが、実はこのことには、われわれの多くが無意識の内に気づいているのではないか。「生涯競争の辛さを免れるため」とは言い得て妙である。

つまりところ、ここに問題の核心がある。これも前に、多くの者が競争のない平和な社会を望んでいるが、それは本質的に不可能だと書いたが、日本はなんと社会全体でこの不可能事を可能にしようとしているのだ。

しかし、当然のことながら、すべての者が平和になれるわけではない。しわよせは教育を受ける者に、そして二次的には教育を与える者にやってくる。しかしその「しわよせ」は一時的なことで、学生であることを終えた時点でこの苦痛は一種の「幸せ」に転ずる。「幸せ」とはいくらなんでも言い過ぎと思われるかもしれないが、ここで言う「幸せ」とは、少・青年期の多少の苦勞が、その人のほぼ一生を安定的に支えてくれる、という意味である。どの程度安定的かは若い時の苦勞による。しかしともかく、ある一定の年齢まで多少の苦勞

をすれば、その後の苦労は最小限ですむというのは、やはり現在の日本の大きな特徴と言わざるをえないのではないか。

この、現在の日本に厚く垂れこめる暗雲のような雰囲気、金と安定のみを求める雰囲気は、このエッセイを書いた当時のロレンスが英国の中で敏感に感じとったものほとんど寸分違わぬものであろう。当時の雰囲気をロレンスは辛辣にこう書いている。

At the gate of the school lies the sphinx who puts this question to every emerging scholar, boy or girl: "How are you going to make your living?" And every boy or girl must answer or die: so the poor things believe. (p. 590)

この“so the poor things believe”は、まるで今日の日本の状況を述べているようではないか。次の言葉も同様だ。“The more money the more intense the fear” (p. 593)。

このような雰囲気を突破するには、ある強いロマン的な思考法が必要であろう。その顕著な一例は、まだ15才だったニーチェが日記に記した言葉である。

「けれども若い頃苦労したおかげで得られた恩典に、ただじっと浴しているなんて、考えてみただけで僕はぞっとする。僕の魂はいつも永遠の春の真只中に立っていなくてはならないのだ。バラの花の季節がようやく終わってしまうときには、僕の生命もまた終わってしまうのだから。」⁽²⁹⁾

もう一つは三島由紀夫の言葉である。

もう少しゆけば、時間は上昇をやめて、休むひまもなく、とめどもない下降へ移ることがわかっている。下降の道で、多くの人はゆっくり収穫^{とりのいれ}にかかれることをたのしみにしている。しかし収穫⁽³⁰⁾なんぞが何になる。向う側では、水も道もまっすぐに落ちてゆくのだ。

これは本論とはいささか違った文脈で現れる言葉だが、その基本的なメンタリティは、上記のニーチェの言葉と同質のものに感ぜられよう。それはともに、後の安定のために一時的な苦労を受け入れる、逆に言えば、一度苦労したから

には、その後は何としてもそれからうまい汁を吸わずにはすませない、という、さもしいといえさもしい根性を、きっぱりと否定する精神である。逆に言えば、生は絶えざる努力と苦闘の連続であり、その努力の白熱した一瞬一瞬に生の意味のすべてがあるのであって、そこに実利的な精神が忍び込む時、その人の生はすでに凋落を始めていると見る、実に仮借ない精神である。

このような精神の共有者たるロレンスも、上記のようなさもしい根性と雰囲気とをかぎとる嗅覚にかけては、おさおさ引けはとらなかった。産業主義、金銭主義（いわゆるマモンの神）、それらと手に手を取った安定指向、これらは彼が終生攻撃してやまないものだった。

彼の教育についての具体的な提言は、他の多くの人々の教育に関する提言と同じく、社会構造、さらには人間の思考法や価値観そのものの变革を別にしては、少なくとも日本では直ちに実行に移せるものではあるまい。いや、彼の教育論そのものが、具体的な有効性を求めたものではなく、最初にも述べたように、むしろ彼の意識観や人間観を確認し、発展させようとしたものなのだ。

そう考えれば、論の多くの部分が教育とは直接関係がないのも、最終章で話が教育からかなりそれることも、いぶかるには当たらない。結局彼の考えは、教育とは小手先の変革くらいで変わるものではなく、真に生きることを幸運にも学んだ一部の人たち（彼が自分をその中に含めていただろうことは想像に難くない）が、長い時間をかけて人々の価値観や思考様式を変えていくことによってしか変わりはしない、というものではないかと思う。そしてそのような「真の」教育は、いかなる制度化された教育にも求められないと考えたのではなかろうか。本質的に“self-study”の人であったロレンスの唯一の教育論の本当の意義は、むしろこの点を明らかにしたことにあるように思う。

注

- 1 D. H. Lawrence, "Education of the People," *Phoenix*, Edward McDonald (ed.) (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1978), p. 603. 以下、この著作からの引用はすべて同版からとし、本文中にページ数のみ記す。
- 2 D. H. Lawrence, *Fantasia of the Unconscious* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1975), p. 15.
- 3 Bertrand Russell, *Mysticism and Logic and Other Essays* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1954), pp. 21-2.
- 4 *Phoenix*, p. 31.

- 5 P. D. ウスペンスキー、『奇蹟を求めて』、拙訳、平河出版社、1981年、p. 176.
- 6 ケン・ウィルバー、『眼には眼を』、吉福、プラブツダ、菅、田中訳、青土社、1987年、p. 341.
- 7 *BLAKE: Complete Writings*, Geoffrey Keynes (ed.) (Oxford: Oxford University Press, 1972), p. 431.
- 8 『眼には眼を』、p. 355.
- 9 *Phoenix II*, Warren Roberts and Harry T. Moore (eds.) (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1978), p. 624.
- 10 『眼には眼を』、p. 350.
- 11 同書、p. 358.
- 12 ケン・ウィルバー、『エデンから』、松尾式之訳、講談社、1986、pp. 278-89.
- 13 *BLAKE: Complete Writings*, p. 380.
- 14 *Idid.*, p. 183.
- 15 *Idid.*, p. 189.
- 16 ルドルフ・シュタイナー、『神智学』、高橋巖訳、イザラ書房、1977年、pp. 175-76.
- 17 Rom Landou, *God is My Adventure* (London: Faber & Faber, 1935), pp. 250-51.
- 18 *Idid.*, p. 271.
- 19 『眼には眼を』、pp. 359-60.
- 20 Maurice Nicoll, *Psychological Commentaries on the Teaching of Gurdjieff and Ouspensky*, vol. 1 (London: Watkins, 1980), p. 5.
- 21 D. H. Lawrence, *Psychoanalysis and the Unconscious* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1975), p. 247.
- 22 ヘルマン・ヘッセ、『荒野の狼』、芳賀檀訳、人文書院、1970年、pp. 83-4.
- 23 同書、pp. 288-89.
- 24 『奇蹟を求めて』、pp. 121-30参照。
- 25 J. D. サリンジャー、『フラニーとゾーイ』、鈴木武樹訳、角川文庫、1969年、pp. 197-98. 文脈に合わせて一部変更。
- 26 西尾幹二、『日本の教育 ドイツの教育』、新潮社、1982年、p. 297.
- 27 自らもロレンスの思想に深く影響を受けている福田恆存は、早くも1969年、「教育制度改革私見」10箇条を発表しているが、そのうちのただの一つとして実現されていない現状を見れば、このことは明らかであろう。参考までに、そのうちで特にロレンスの提案と共通するものを挙げておこう。

五 国民学校の前半においては、読み書き算盤、躰、体育、図工、音楽の基礎科目のみを授け、社会科等、教師さえ理解せざるものを一切教授せざる事。

六 その教授法も智育を専らにし、徳育などという曖昧なる教育を施さざる事。言い換えれば智もまた徳なるが如き智育を施す事。同様個性尊重などという妄語に惑わされず、子供は愚か、大人にも感心すべき個性ある者などに生涯滅多に出遭わざりし吾等の経験に徴し、個性らしきものを認めし時は専らこれを扼殺せんと計り、以て子供に抵抗力を授け、それにより真の個性の芽生えん事を期すべき事。(福田恆存他、『私の大学再建案』、新朝社、1969年、p. 168.)

28 『日本の教育 ドイツの教育』、p. 265.

29 同書、p. 97. 一部変更。

30 三島由紀夫、『天人五衰』、新潮文庫、1982年、p. 132.

(1992年 9 月30日 受理)